



## The first surgeon to perform gastric resection

小川 健治

ポーランド外科学会 名誉会員  
東京女子医科大学 名誉教授

少し古い話で恐縮ですが、第74回日本消化器外科学会総会（2019年7月開催）のワークショップ「知られていない消化器外科の歴史」におきまして、特別発言をさせていただき栄誉を賜りました。会長の矢永勝彦教授（東京慈恵会医科大学 外科学講座 消化器外科分野）、司会を務められた木村理教授（山形大学 外科学第一講座）、山本雅一教授（東京女子医科大学 消化器外科学）に改めてお礼申し上げます。

### 知られていない消化器外科の歴史、飲水思源

この大変興味深いテーマに関して、以下の6題のご発表がありました。

1. 右肝切除を中心としたパイオニアの偉業  
七島篤志先生（宮崎大学医学部 肝胆膵外科学）
2. 遺伝性非ポリポーシス大腸癌の本邦における歴史  
—三重県発のエビデンスとして—  
奥川喜永先生（三重大学大学院 消化管・小児外科学）
3. 直腸癌手術に情熱を注いだ偉大なる先人たち  
長山聡先生（がん研究所 有明病院 消化器外科）
4. カステラは400年前のERASだった  
丸屋安広先生（長崎大学大学院 移植・消化器外科）
5. 消化器外科の歴史 —直腸癌を中心に—  
大谷博先生（大野記念病院 外科）
6. 自動縫合器誕生秘話  
生駒久視先生（京都府立医科大学医学部 消化器外科学）  
なお、会長・司会・演者のご所属は、いずれも当時のものです。

演者の皆様、有り難うございました。6題ともよく調べられた貴重なご発表で、私自身も大変勉強になりました。詳細は抄録集をご参照ください。その中で、

2席の奥川先生の抄録に「飲水思源（水を飲んで源を思う）」という中国の故事成句が織り込まれていました。まさにその言葉通り、私たちは今、最新の外科学を駆使している、つまり先人の努力の賜物であるおいしい水を飲んでいるわけですが、その源に思いをはせ、特に余り知られていない水源を訪ねる……というのがこのワークショップの狙い、と思考しました。

そこで私の特別発言ですが、私も演者の1人になったつもりで「Who is the first surgeon to perform gastric resection?」というタイトルでお話しさせていただきました。

### Bonn, Warsaw, Krakow

話の始まりは、34年前の1988年に遡り、ボン、ワルシャワ、クラコウでのこととなります。当時、日本は肝移植の黎明期で、私もボン大学の移植外科に留学しました①。主任のT.S.Lie教授は、ヨーロッパ大陸で初めて肝移植を成功されたご高名な方です②。このラボに、当時は共産国で出国も難しかったはずのOlszewski教授（ポーランド科学アカデミー 実験外科）がよくみえており、ある日「君、ポーランドに來ないか?」というお誘いを受けました。Lie教授の後押しもあり、早速ワルシャワに出掛け、彼のラボで日本の胃癌について講演させていただきました③。そこで「君の専門は胃癌か、ポーランドで胃癌ならPopiela教授だ」ということになり、翌日、クラコウのヤギェウオ（Jagiellonian）大学を訪ねました。クラコウ④、⑤はポーランドの古い首都（ワルシャワ遷都は1596年）、今は文化の街で、日本でいえば京都でしょうか。同大学は1364年設立、世界でもっと



左上から  
 ① ポン大学移植外科研究室、後列右から2人目が Lie 教授 ② Lie 教授ご夫妻と私の妻（中央）、2012年モーゼルワインの銘醸地、ベルンカステルにて ③ ポーランド科学アカデミー実験外科研究室、右端が Olszewski 教授 ④ クラコウの街並み、11～16世紀に栄えたヤギェウオ王朝のヴァベル城から見たもの、綺麗です ⑤ マリア教会、クラコウ市街の中心地にあり、社会主義時代の暗い雰囲気は微塵もありません ⑥ ヤギェウオ大学 Popiela 教授室、右が Popiela 教授、肖像画が Rydygier 教授その人、ポーランド外科学の父といわれます ⑦ ポーランド外科学会100周年記念大会開会式、Jaruzelski 大統領（当時）の挨拶、左端に Popiela 教授

も古い大学の一つです。

教授室に招かれ、Popiela 教授は私に「Who is the first surgeon to perform gastric resection for gastric cancer?」と質問されました(⑥)。私は迷わずウィーンの Billroth 教授と答えました。教授は「No, no!, it was the person in the picture, he is the true first surgeon.」と壁の肖像画(後で Rydygier 教授とわかる、1887年同大学教授就任)を指さしました。巷では Billroth といわれているが、ポーランドの地方都市ヘルムノ(Chelmno)の無名の外科医 Ludwik Rydygier がそれより数カ月前に1例目を行い、報告もしている……のだそうです<sup>1-4)</sup>。

そんなやり取りがありまして、翌1989年9月、Popiela 教授が主宰されたポーランド外科学会100周年記念大会にご招待を受け、当時の上司、梶原哲郎教授と医局員で参加しました(⑦)。Rydygier 教授はこの学会の創設者の1人、しかも第1回大会(1889年)の会長ですから、この学会の主宰は、Popiela 教授に

とって大変な名誉です。また、これを契機に日本とポーランド両国の外科医の交流が始まりました<sup>5)</sup>。

この時期、ポーランドを始めとする東欧諸国では民主化のうねり(東欧革命)が起こっていました。同年11月ベルリンの壁崩壊、翌1990年11月にはご存じ「連帯」のワレサ議長が大統領に就任してポーランドは民主化されました。東欧民主化の先駆的役割を果たしたわけで、後で考えると、こうした歴史的瞬間にポーランドを訪問していたこととなります。西ドイツ(当時)経由で帰りましたが、その時、ベルリンの壁崩壊の予兆を感じたことを覚えています。

また、Popiela 教授は2009年に第8回国際胃癌学会を主宰されました。やはり、ポーランドで胃癌なら Popiela 教授ですね。

### Gastric resection — Billroth or Lydygier ?

改めて gastric resection について検証してみましょう。いつ (when)、どこで (where)、だれが (who)

に加えて、どのように行ったという発表 (how; publication) が必須項目です (⑧)。実は、1 例目は 1879 年、当時フランスの外科第一人者、Peau が行っています。2 例目は 1880 年の Rydygier、3 例目が 1881 年の Billroth です<sup>1-4, 6)</sup>。

論文発表 (publication) は、Peau は発表なし、Rydygier はポーランド語<sup>7)</sup>、ドイツ語<sup>8)</sup> で発表、Billroth はドイツ語<sup>9)</sup> で発表しています。その時期 (when) をみますと、Rydygier のポーランド語は Billroth より 2 カ月早い、ドイツ語は 1 カ月遅いということになります。この経緯から、ヤギェウオ大学の Pach ら<sup>3)</sup> は、Rydygier に 1 例目という名誉が与えられてしかるべき……と主張しています。さらに Sublinski ら<sup>1)</sup> は、Peau は 1 例目を行ったが何ら記録を残していない、Rydygier は 2 例目だがポーランド語、ドイツ語で発表している。しかし、2 人の患者は術後早期に死亡しており、1 例目の名誉には、患者が生きた Billroth が浴した。ウィーン外科学の総帥である高名な外科医とドイツ占領下ポーランドの地方都市ヘルムノの無名な外科医とを比べれば、こうした名誉をどちらに与えるかは明白……と述べ、悔しさを滲ませています。

### Priority — when, where, who, publication

このいわゆる priority の問題ですが、上記の when, where, who, publication が決め手です。Rydygier と Billroth をこの項目で比べてみましょう (⑨)。ポーランド最員の私には残念ですが、やはり Billroth が圧倒的に有利で、現在に至るまで first surgeon は Billroth が定説です。私の知人で親日家の Bielecki 教授 (ワルシャワ卒後医学教育センター一般・消化器外科学) は<sup>10)</sup>、このことを肯定しながら、Rydygier は疑いなくポーランド外科学の父とし、胃潰瘍に対する胃切除 1 例目をはじめ、外科各分野における数々の業績を紹介しています。また Rydygier 自身、この priority を何とか Billroth から取り戻そうと生涯努力した……とも述べています。

この Rydygier の業績、そして今回のワークショップ 1、2、3、6 席で紹介された業績 (⑩) が広く世界に知られなかった、priority を得られなかったのは、やはり publication が一番の問題といえます。新しい発見や開発が日の目を見るためには、今なら英文で報告して世に広め、広く検証してもらうことが必要……

常にいわれることですが、改めて肝に銘じました。本ワークショップの教訓です。

また、5 席では消化器外科の歴史が述べられました。前記の Rydygier や Billroth の胃癌手術、伊藤教授、鳥潟教授、Miles らの直腸癌手術も、19 世紀中盤の麻酔や消毒法の開発で初めて可能となったわけです。




4 席の ERAS に関連して、当時の術後栄養管理はどういうものだったのでしょうか？ 田淵崇文教授 (東京医科大学 消化器外科学分野) の最終講義報告<sup>11)</sup> に、Billroth 1 例目の術後経過を、現在私たちが使っている温度板に書き直したものがありました。これは力作、術当日から退院する術後 23 病日までの経過がよくわかります。ぜひご参照ください。栄養管理は、輸液や輸血などない時代で、経口と浣腸が頼りです。経口は第 1 病日からまず氷片、そしてスプーン 1 杯の butter milk を 1 時間毎、5～7 病日には sweet milk、cocoa milk、tea、coffee、wine など追加されました。8 病日以降は日に 1 L 以上の milk が飲めるようになり、egg、bouillon、biscuit、ham など順次与えられ、14 病日以降は meat を摂取できたようです<sup>6)</sup>。また、滋養浣腸は第 1 病日から 1 日 3 回ワインとペプトンの浣腸、前者は 12 病日まで継続、後者は下痢で中止したとあります<sup>6)</sup>。この滋養浣腸とは「Nutrient enema of former times; frequently contained eggs, bouillon, honey and sometimes wine」だそう<sup>12)</sup>……まさに隔世の感がありますね。

Billroth or Lydygier をはじめ、本稿は priority 争いに敗れた人の話になりました。しかし、まさに消化器外科学の知られざる水源を訪ねた思いです。こうした方々の努力や業績が、今の消化器外科学の発展に大きく寄与していることは疑いもありません。これからの若い外科医の皆様も、こうした先人の努力に習って、小さくてもいいですから新しい知見を生み出す、新しい術式を工夫する・編み出す……という姿勢で頑張っていたいただきたいと思います。

### Professor Olszewski passed away

一昨年(2021)の 11 月に、「I have very bad and sad news. Professor Olszewski passed away on November 8.」というメールを受けました。8 月には元気に日本に来たのに……突然の訃報に私はびっくりし、「I was surprised at the sudden announcement,

**Gastric resection - Pean, Lydygier, Billroth**

1879, Apr. in Paris	1880, Nov. in Chelmo	1881, Jan. in Vienna
Jules Emile Pean (1830-1898)	Ludwik Rydygier (1850-1920)	Theodor Billroth (1829-1894)
		
The patient (male) died 5 days after the procedure. Pean appraised the operation sceptically and did not publish in the medical paper.	The patient (64-yo, male) died 12 hours after the procedure. Rydygier published a detailed surgical procedure in the <i>Polish and German journals</i> (1880, Dec., 1881, Mar.).	The patient (43-yo, female) discharged 26 days after the operation, and lived for 4 months. Billroth announced his achievement in <i>Wiener Medizinische Wochenschrift</i> (1881, Feb.).

⑧

**Priority of Gastric resection - Lydygier or Billroth ?**

when		where	
Ryd.	1880, Nov. 16	Private hosp. in Chelmo	
Bill.	1881, Jan. 29	Univ. hosp. in Vienna	
who		publication	
Unknown young surgeon (30-yo)		1880, Dec.	in Polish
Prof. of surgical dept. (52-yo)		1881, Feb.	in German

⑨

**Pioneer's accomplishment in the field of Digestive Surgery**

1. **Right anatomical hepatectomy :**  
Honjo (本庄一夫) in 1949, Jacob in 1951 reported.
2. **Hereditary non-polyposis colorectal cancer :**  
Kameya (亀谷 忍) in 1969, Lynch & Krush in 1971 reported.
3. **Abdominoperineal resection for rectal cancer :**  
Ito (伊藤隼三) in 1904, Miles and Torigata (鳥淵隆三) in 1908 reported.
6. **Automatic suturing device :** Mine (峰 勝) in 1958 developed, Androsov (PKS-25) in 1960 produced.

⑩



⑧ Pean, Lydygier, Billroth の胃切除、3W1H です ⑨ 1例目の名誉、Billroth に軍配です ⑩ 今回のワークショップ1、2、3、6席で紹介された先人の偉業 ⑪ Olszewski 教授と私、2007年ワルシャワでのシンポジウムにて

Professor Olszewski passed away. Please accept my sincere condolences. I've been friends with him for over 30 years. He was a great scientist and talented doctor, and always my teacher. I can't believe he died, and unthinkable of Poland without him. Thank you Professor Olszewski, for 30 years interaction, kindness and friendship.」というメールをポーランドの知人たちに返しました。

1988年に彼に会ってから、ずっと交流を続けてきました(⑪)。日本が大好きで、来日・講演回数は数知れず、日本外科学会の名誉会員にも推戴されています。今回のRydygierに関する資料も送ってもらいました。それがなければ、この原稿も書けなかったわけです。改めて彼に感謝と哀悼の意を捧げ、心からご冥福をお祈りいたします。

そして、今回のロシアのウクライナ侵攻です。ポーランドはウクライナの隣国、ロシアの飛び地と直接国境を接しているところもあります。避難民の方々が多く入国していますし、EU、米国など各国のウクライナ支援の拠点ともなっています。経済的負担は大変で

しょうし、支援には人道支援に加え軍事支援もあります。戦争への恐怖も、遠く離れた私たちとは比べものにならないはずです。戦争が終結し、早く平和と日常生活が戻ることを心から祈って、本稿を終えたいと思います。

文献

- 1) Sublinski T et al. *Surgery, Gynecology & Obstetrics*. 172:493-6, 1991.
- 2) Komorowski AL et al. *Chr Ital*. 58:231-4, 2006.
- 3) Pach R et al. *Gastric Cancer. Japan*. 11:187-91, 2008.
- 4) 岡島邦雄. *胃がん perspective*. 2:225-9, 2009.
- 5) 小川健治. *W Waves*. 20:51-5, 2014.
- 6) Translated Absolon KB et al. *Review of Surgery*. 25:381-408, 1968.
- 7) Lydygier L. *Przegląd Lekarski*. 19:637, 1880.
- 8) Lydygier L. *Deutsch Centralblatt Chirurgie*. 14:252-60, 1881.
- 9) Billroth T. *Wien Med Wschr*. 31:161-6, 1881.
- 10) Bielecki K. *J Physiology Pharmacology*. 62:125-30, 2011.
- 11) 田淵崇文, *東医大誌*. 73:221-30, 2015.
- 12) Mackenzie JW et al. *Arch Dis Child*. 18: 22-7, 1943.